



## 第2章

# 食を取り巻く現状と課題

## 1 前計画の評価

三島市の現状に沿って施策を見直し、さらに効果的な食育を推進するため、前計画の期間5年間の食育の推進に関する取り組みについて、数値目標の達成度で評価しました。

### ● 評価方法 ●

評価は、直近値と計画策定時の値を比較し、以下のとおり評価しました。

評価	基準
◎	目標を達成した
○	目標は達成していないが改善した
—	ほとんど変化していない（変化が3ポイント以内）
△	悪化した

なお、目標値は前計画策定当初に設定した平成24年度を目標とし、計画策定時の値、直近値は以下の表記とします。

### ● 計画策定時の値

- ※1：平成18年度の値
- ※2：平成19年度の値

### ● 直近値

- ※3：平成23年度実績
- ※4：平成24年度 三島市の食育推進に関する調査結果



## (1) 前計画全体の評価

評価は、前計画全体の推進目標（1項目）の評価を行いました。

### 目標に対する評価と課題

- 食育に関心のある人の割合は、大きな変化がみられません。食への関心は、食育の実践につながるため、食に対する興味や関心を高める啓発方法について再検討することが必要です。

指 標	計画策定時の値	目標値	直近値	評価
食育に関心のある人の割合	75.2%※2	90.0%以上	73.3%※4	—

## (2) 前計画基本目標別の評価

評価は、前計画の基本目標別の推進目標（16項目）の評価を行いました。

### ①「健康な体を保つ」ために

#### 目標に対する評価と課題

- 自分の健康状態を「よい」「まあよい」「ふつう」と思っている人の割合は大きな変化がみられません。個人の健康観の向上につながる食育の推進が求められます。
- 肥満（BMI 25以上）の人の割合は、40歳以上の男女ともに減少し、目標を達成しています。また、肥満傾向の児童・生徒の割合も減少傾向にあり、健康づくりの取り組みなどがあいまって、全体に肥満傾向が解消してきていることがうかがえます。
- メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）の認知度は高くなっており、健康への関心の高まりとともに知識が浸透していることがうかがえます。
- 朝食をとっている幼児・児童・生徒の割合は、大きな変化がみられませんが、20歳以上の朝食を毎日食べる人の割合は増加しており、朝食の摂取に関する啓発活動の効果があがります。朝食欠食の理由をみると、「時間がない」ことが理由とし

て多くあげられていますが、朝食摂取による効果や健康的な食習慣の必要性などを今後も伝えていくことが求められます。

- ・バランスのとれた食事に気をつけている人の割合は低くなっており、バランスのとれた朝食をとっている幼児・児童・生徒の割合や食事バランスガイド等を参考に食生活を送っている人の割合は、大きな変化がみられません。バランスのとれた食事を実践するために、「食事バランスガイド」「食生活指針」などの指針等の活用を啓発していくことが必要です。

指 標	計画策定時の値	目標値	直近値	評価
① 自分の健康状態を「よい」「まあよい」「ふつう」と思っている人の割合				
20歳以上	79.8%※2	90.0%以上	80.6%※4	—
② 肥満傾向の児童・生徒の割合				
	8.3%※1	6.5%以下	7.1%※3	—
③ 肥満（BMI 25以上）の割合				
40歳以上 男性	30.6%※1	25.0%以下	23.8%※3	◎
40歳以上 女性	26.0%※1	20.0%以下	19.3%※3	◎
④ メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）を認知している人の割合				
20歳以上	78.9%※2	90.0%以上	86.3%※4	○
⑤ 朝食をとっている幼児・児童・生徒の割合				
	97.6%※1	100%	98.6%※3	—
⑥ 朝食を毎日食べる人の割合				
20歳代	60.3%※2	85.0%以上	68.3%※4	○
⑦ バランスのとれた食事に気をつけている人の割合				
20歳以上	68.8%※2	80.0%以上	63.5%※4	△
⑧ バランスのとれた朝食をとっている幼児・児童・生徒の割合				
	45.4%※1	80.0%以上	43.8%※3	—
⑨ 食事バランスガイド等を参考に食生活を送っている人の割合				
20歳以上	17.0%※2	30.0%以上	19.5%※4	—



- その他のアンケート調査結果
  - 朝食を欠食する理由
    - 1位：時間がないから（30.9%） 2位：仕事などで時間が不規則だから（17.6%）、
    - 3位：食欲がないから、いつも食べないから（15.4%）
  - 食事バランスガイドの認知度
    - 「言葉は知っているが、内容は知らない」35.3%
    - 「言葉も内容も知っている」32.3% 「言葉も内容も知らない」31.9%

## ② 「豊かな心を育む」ために

### 目標に対する評価と課題

- 「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをしている人の割合は、大きな変化がみられません。食事の際のあいさつの意味を知ることから、食への関心につなげる教育が求められます。

指 標	計画策定時の値	目標値	直近値	評価
① 調理体験を実施している幼稚園・保育園の割合				
	調査実績なし	100%	91.7%※3	不能
② 「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをしている人の割合				
20歳以上	79.0%※2	100%	78.3%※4	—

## ③ 「食の安全・安心」のために

### 目標に対する評価と課題

- 食品の安全性に関する基礎的な知識を持っている人の割合は大きな変化がみられません。安全・安心な食生活を送るために、食品の安全性に関する知識と理解を深め、食を選択する力を育てることが必要です。

指 標	計画策定時の値	目標値	直近値	評価
① 食品の安全性に関する基礎的な知識を持っている人の割合				
20歳以上	61.3%※2	80.0%以上	61.9%※4	—

## ④「食文化を守り、育てる」ために

## 目標に対する評価と課題

- 学校給食における地場産物を使用する割合は増加しています。
- “地産地消”の言葉を知っている人の割合は、8割以上を占めており、目標を達成しています。

指 標	計画策定時の値	目標値	直近値	評価
① 学校給食における地場産物を使用する割合				
食材数ベース	32.4%※1	40.0%以上	38.0%※3	○
② “地産地消”の言葉を知っている人の割合				
20歳以上	59.7%※2	80.0%以上	84.3%※4	◎

## ⑤「環境を未来に引き継ぐ」ために

## 目標に対する評価と課題

- 食べ残しを減らす努力をしたり作りすぎに注意している人の割合は、8割以上を占めているものの、計画策定時から大きな変化はみられません。このため、環境面や食への感謝の念を育むためにも、環境にやさしい食生活を広めることが必要です。

指 標	計画策定時の値	目標値	直近値	評価
① 食べ残しを減らす努力をしたり作りすぎに注意している人の割合				
	90.8%※2	100%	88.0%※4	—
② 買物袋を持参している人の割合				
	15.5%※2	50.0%以上	85.4%※3	◎



## 2 三島市の食育の現状と課題

市民の「食育の認知度」「食育の関心度」「食育の実践度」の3点から、三島市の食育の推進にかかる現状と課題をまとめます。

この項目は、平成 24 年度に実施した「三島市の食育推進に関する調査」結果をもとにしています。「三島市の食育推進に関する調査」の実施概要は以下のとおりです。

### 「三島市の食育推進に関する調査」の実施概要

① 調査の目的

三島市食育基本条例に基づき「第2次三島市食育基本計画」を策定するにあたり、市民の食に対する意識や三島市の現状を把握し、計画策定のための資料とすることを目的とします。

② 調査対象

無作為に抽出した 20 歳以上の市民 2,000 人

③ 調査期間

平成 24 年 6 月 15 日から平成 24 年 6 月 29 日

④ 調査方法

郵送による配布・回収

⑤ 回収状況

配布数：2,000 通、有効回答数：1,004 通、有効回答率：50.2%

⑥ 調査結果の表示方法

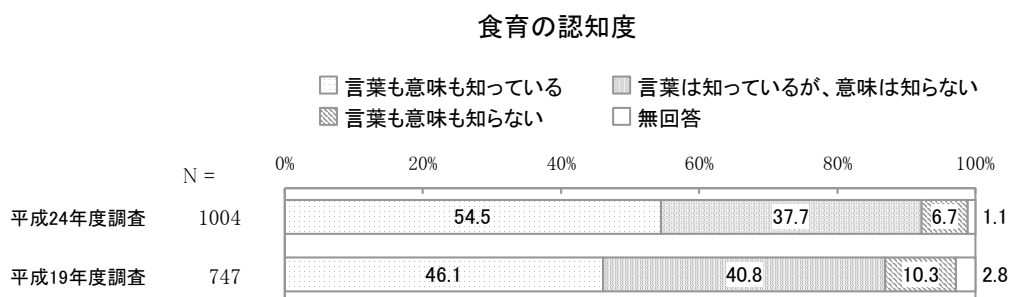
回答は各質問の回答者数（N）を基数とした百分率（%）で示してあります。また、小数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の合計が 100.0%にならない場合があります。

複数回答が可能な設問の場合、回答者が全体に対してどのくらいの比率であるかという見方になるため、回答比率の合計が 100.0%を超える場合があります。

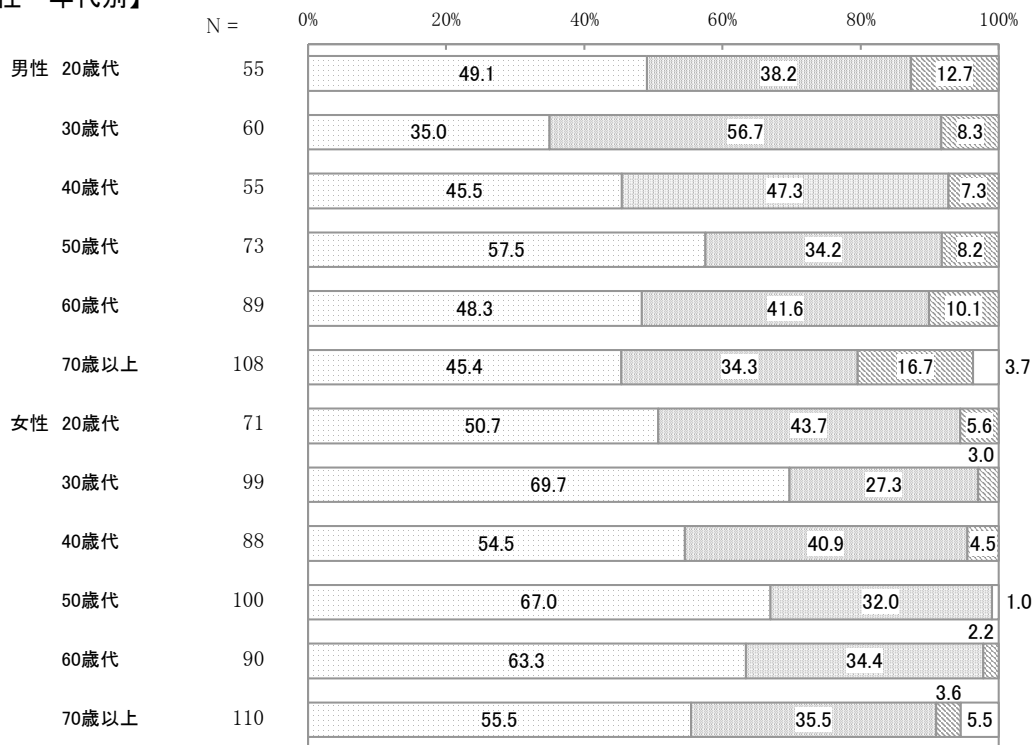
クロス集計の場合、無回答を排除しているため、クロス集計の有効回答数の合計と単純集計（全体）の有効回答数が合致しないことがあります。

## (1) 食育の認知度

食育の認知度は、92.2%（「言葉も意味も知っている」「言葉は知っているが、意味は知らない」をあわせた割合）となっており、市民の大半が食育という言葉を知っている結果となっています。しかし、理解度として「言葉も意味も知っている」割合は、他の年代に比べて男性の30歳代が低く、子育て中かこれから結婚する世代でもあることから食育に関する理解を深める必要があります。



### 【性・年代別】

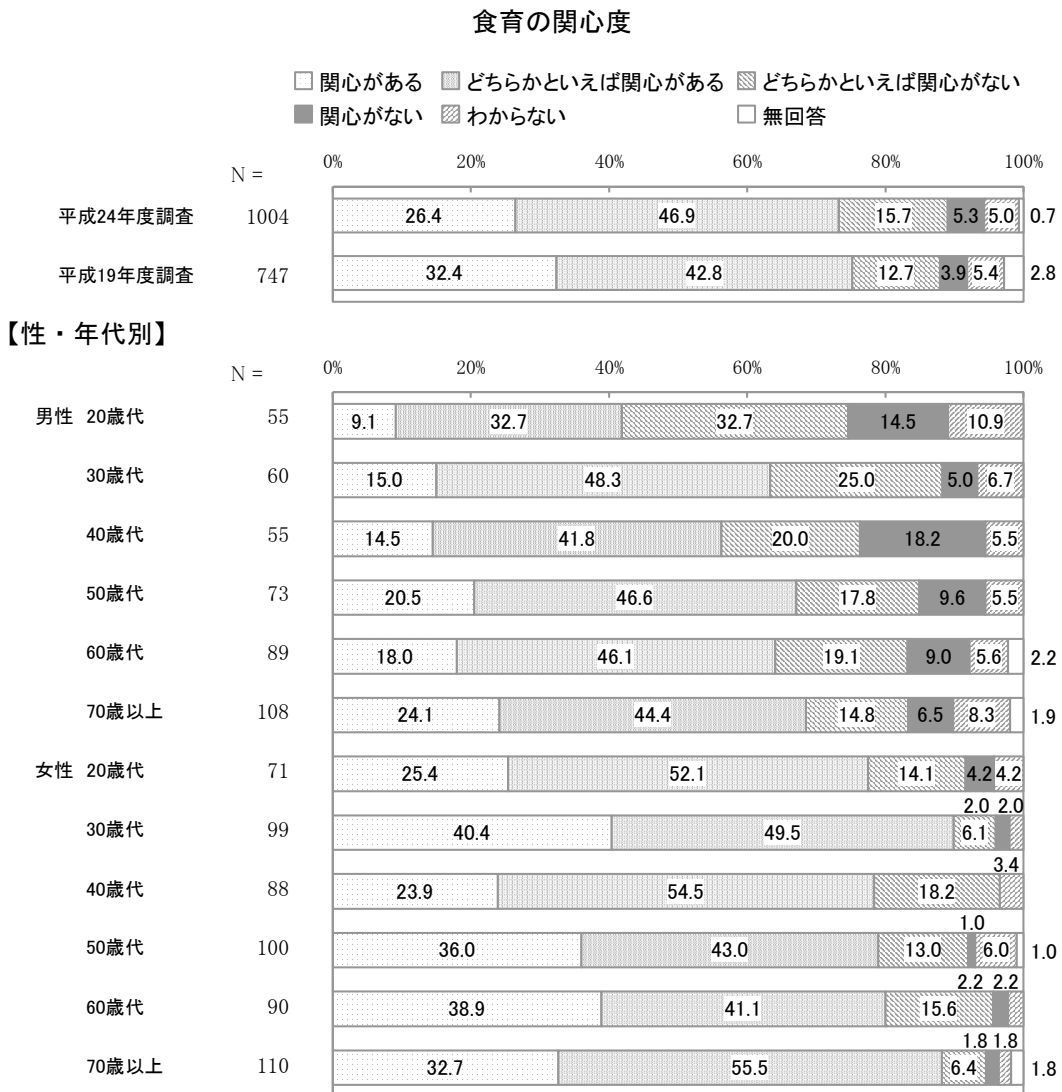


資料：三島市の食育推進に関する調査



## (2) 食育の関心度

食育の関心度は、73.3%（「関心がある」「どちらかといえば関心がある」を合わせた割合）となっていますが、前回調査から大きな変化はみられません。前計画では、子どもの食育に重点をおき、子どもから親へ、また、子ども自身の食育力を高めることを進めてきました。しかし、他の年代に比べて男性の20歳代は約4割と低くなっており、食育の認知度が低いことも影響していることがうかがえます。認知度が低い年齢層を対象として食育の関心を高めることが必要です。

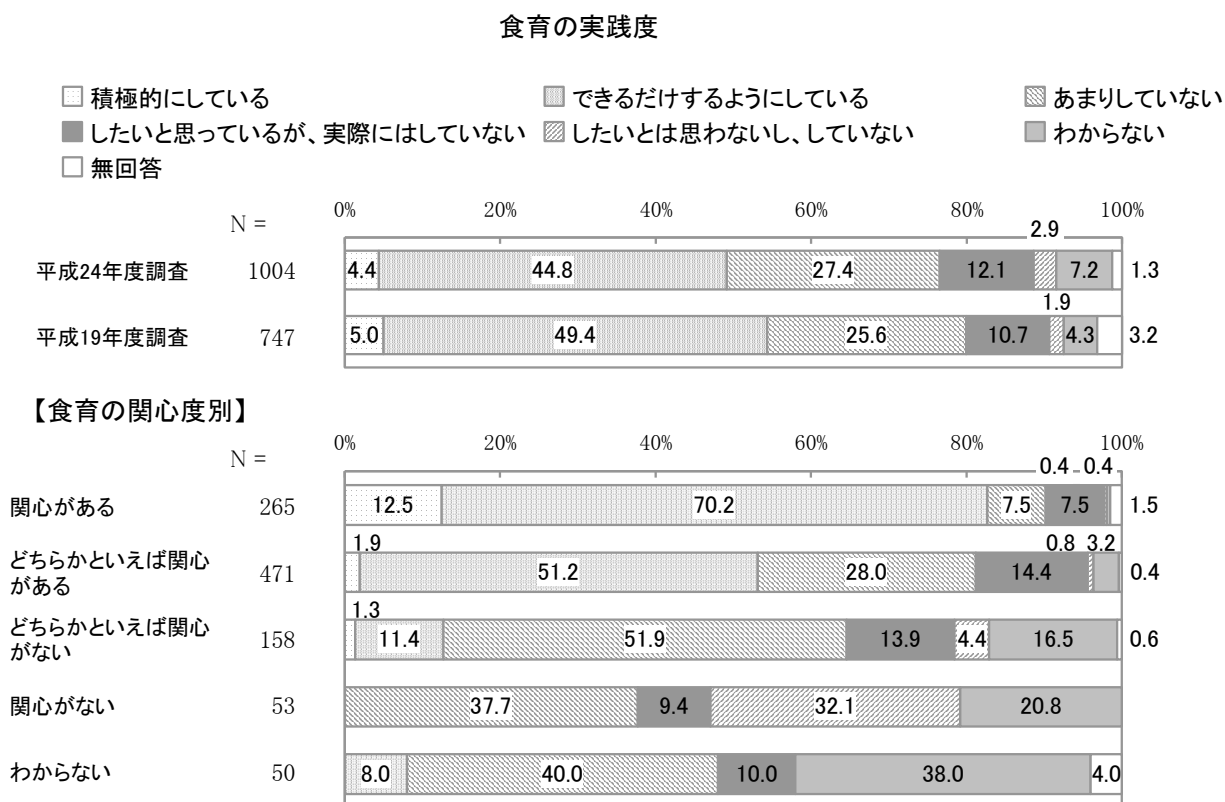




### (3) 食育の実践度

食育の認知度は、約9割と高くなっているものの、食育を実践している人の割合は49.2%（「積極的にしている」「できるだけするようにしている」をあわせた割合）に留まっています。前回調査と比較しても実践している人の割合は減少しており、実践していない理由として、忙しいことや食費に対する経済的理由が挙げられています。

なお、食育に関心がある人ほど食育を実践しており、心身の健康を保つ上での食育の重要性を伝え、関心を高めることが必要です。



資料：三島市の食育推進に関する調査

